

# 平成27年産米の収量・品質・食味結果

■ ハナエチゼン・コシヒカリとも減収の中、日本晴は平年並みの収量 ■

平成27年産米の作柄は田植え期から出穂期まで天候に恵まれ豊作基調でしたが、8月中旬以降は気温、日照時間とも平年を下回って経過したため、登熟が不良となり、コシヒカリやあきさかりで網下米(屑米)が極めて多くなりました。

管内90ヶ所で行った生育展示圃の坪刈り調査の結果では、ハナエチゼンはカメムシ斑点粒の発生(色彩選別屑米の多発)による収量の低下、コシヒカリ・あきさかりでは登熟不良(網下米の多発)による減収、日本晴はどちらも少なく平年並みの収量となりました。

## 1) 生育調査圃脱穀調査データ

品種名	調査点数(点)	全重(kg/10a)	籾重(kg/10a)	わら重(kg/10a)	粗玄米重(kg/10a)	精玄米重(kg/10a)	網下重(kg/10a)	網下率(%)	整粒歩合(%)	食味スコア
ハナエチゼン	2	1,162	652	472	487	459	28	5.7	66.7	72
コシヒカリ	39	1,268	662	573	487	424	63	12.9	70.1	81
あきさかり	11	1,321	696	564	517	450	67	13.0	73.9	78
日本晴	13	1,603	716	819	550	510	40	7.3	75.3	74

2) 農家ヒアリング調査データ コシヒカリ 456 kg/10a あきさかり 453 kg/10a

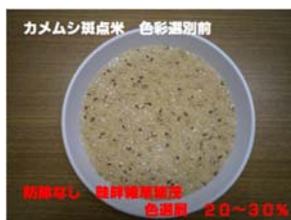
## 3) ハナエチゼン 品質結果

今年はハナエチゼンの幼穂形成期から出穂4日前までの気温が低く、全体的にもみ殻が小さくなったものの、登熟期間の気温が高く、日射量についても十分に確保されたことで、米粒の発育が良くなり、割れ籾が多く発生しました。その割れ籾の隙間から近年増加傾向にあるカスミカメムシ類が吸汁したため、斑点米が多く発生し、品質低下を招いただけでなく、色彩選別処理の屑米も多くなり、収量が少なくなったものと思われます。

畦畔の雑草と割れ籾の多発



## ■ 斑点米対策

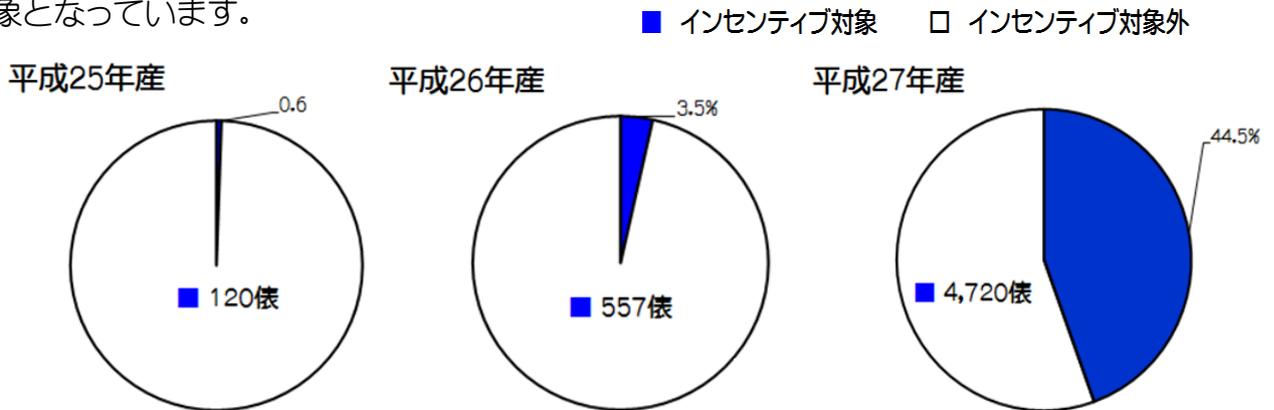


今年の結果では、ラジコン防除を2回実施した圃場の場合は色彩選別処理をすれば1等格付けになるものが多く、防除をせずに畦畔や本田内に雑草が繁茂している圃場では規格外レベルの斑点粒被害が見られるため、色彩選別処理をしても2等~3等にしかならない状況でした。

このことから畦畔の草刈りや本田内の後発ヒエの抑制と併せて、ラジコンヘリによる面的一斉防除を行うことで、斑点粒の発生量を少なくすることが重要だと思われます。又、6月に収穫した大麦跡地の草刈り(モアがけ)などで、地域一円の生育密度を下げること、近隣圃場への吸汁被害を防ぐことにつながります。

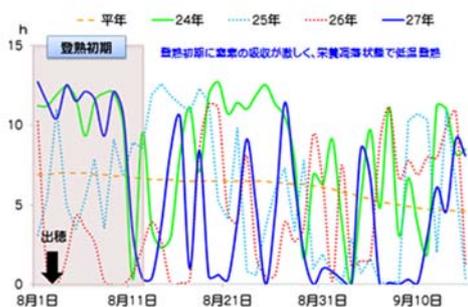
#### 4) コシヒカリ 品質・食味結果

コシヒカリの品質(整粒歩合)・食味値は近年になく良好な状況(倉前上位等級比率93.6%)で、特別栽培コシヒカリ出荷量の44.5%(4,720俵)がインセンティブ買入制度の対象となっています。



コシヒカリの食味向上要因については、登熟初期に窒素の吸収が激しく、稲体の窒素量が少なくなったためと推測されます。又、整粒向上要因は5月中下旬の適期田植えによる出穂時期の適正化で、出穂後20日間の平均気温が27度を下回ったためと思われる。

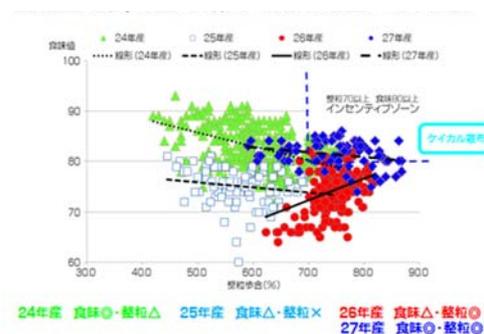
**食味向上条件 (登熟初期の日照時間)**



**整粒向上条件 (高温登熟回避)**



収量を確保された方やインセンティブの対象となった方の栽培方法を分析すると、ケイカルなどのけい酸資材で「土づくり」を実践しているケースが多くなっています。JA管内でインセンティブのコシヒカリが最も多く生産される南条地区の土づくり実施率は50%を超えています。(管内平均20~30%)



#### 5) あきさかり 品質結果



省農薬栽培等のあきさかりについては、いもちなどの病害は大きな問題とならず、通常の栽培と変わらない収量および高品質、高食味となりました。(倉前上位等級比率98.2%)

又、除草対策とした7月10日頃まで中干しの開始時期を延ばす(中干し延期)により、当初心配した本田内の雑草(ヒエ)の発生も抑えられている圃場がほとんどでした。

